

ジョン・ウェスリと家族をめぐる一考察 ——ジョンと妻メアリについて——

岩本 助成

はじめに

本小論は、ジョン・ウェスリと妻メアリに関する一考察である。ただ、彼らの結婚には、ジョンとグレース・マリ（Grace Murray）との「婚約問題」が深く関わっていたのではないかと、筆者は考えている。そこで、小論の前半で、彼の婚約問題を取り上げたい。（ただ、妻メアリと、かつての婚約者グレース・マリとの間に、何らの関係もなかったことを付言しておきたい）。

小論の後半で論じるジョン・ウェスリと妻メアリについての資料だが、メアリによって多くの手紙など、貴重な資料が破棄され、散逸してしまったと考えられており、残されているメアリ宛てのジョンの手紙 20 数通を通して、その結婚生活の一端を窺い知るのみである。当然、これらの資料はジョンの考えや立場を証するもので、メアリのそれを立証する資料に欠ける¹。

確かに、ジョンとメアリの結婚生活は、多くの人々が結論付ける「不幸なもの」であったかも知れない。しかし、筆者は、彼らの幸不幸を決めつけず、実際の生きさまがどのようなものであったかを知りたく願う。そのためにも、1751年2月から1781年10月までの30年間の結婚生活について、可能な限

¹ 参考文献として、まず、J. A. Leger, *John Wesley's Last Love*, J. M. Dent & Sons, 1910を挙げたい。後の研究書は多くを本書に負っている。また、Bufford W. Coe, *John Wesley and Marriage*, Lehigh Univ. Press, 1996を挙げる。同書の参考文献表を参照されたい。ウェスリの伝記や研究書における論述も、それぞれ興味深い。

り、第1次資料を調べたい。

基本資料から知り得る的確な状況を理解しないまま、両者を、あるいは、一方を酷評したり、弁護したりしてはなるまい。結婚生活の実態を知ることが何よりも重要である。それらの実態が、いかに不幸な状況を示すにせよ、彼ら自身は、互いに結婚生活を支えようと努力したわけだし、懸命に生きようとした筈である。従って、筆者は、残存する僅かな手紙や他の資料を通して、彼らの状況をより正確に知り、「彼らなりの精一杯の生きさま」を学びたいと願っている。

ジョン・ウェスリは、生涯にわたって、「キリスト者の完全、全き愛」を中心に、「キリスト者生活における聖化の恵みと、恵みとしての課題」を追い求めた人物である。彼は、当時、苦悩や悲しみを負い、さまざまな試練に耐えようとする多くの人々に、愛なる神の救いの御こころを解き明かし、すべてが相働いて益をもたらすとキリストの福音を説き続けた。神が与えてくださった試練は、ひとり、ひとりをして、「へりくだった、やさしい、忍耐強い愛」、つまり、きよめ、ホーリネスに満たすためのものであると慰めている²。

「傷ついた癒し人」ジョン・ウェスリその人に対してこそ、彼自身の「聖化の福音のメッセージ」が当てはまるのではないか。ウェスリは、『キリスト者の完全の明らかな説明』（1766年）を編み、キリスト者の完全をめぐる、1725年から執筆時にいたるまでの、40年にわたる彼の教説の展開と、種々の論議を集めて世に問うた。彼は、同書で「キリスト者の完全とは何か」を定義するが、その「問3」において、「しかし、すべての思い、言葉、行ないが純粋な愛によって支配されているのに、同時に無知や過失から免れられないということがあり得るのか。」を問い³、その問いに対して肯定的に答える。「この死ぬべき身体が不死を着るまで、現実的な過ちから解放され

² 例えば、1782年4月12日の手紙など。 *The Letters of the Rev. John Wesley, A.M.* (ed. John Telford), Vol. 7, p.120, Epworth, 1931.

³ 『キリスト者の完全』（訳・注、藤本満）イムヌエル綜合伝道団、2006年、124頁。

ることを期待しない」と述べ⁴、「恵みによる、神と隣人への全き愛」を追い求める歩みにも、判断における過ちは、実践における過ちを引き起こすが、これらの過ちを罪と呼ぶことは適切でないとして断じている。ただ、わたしたちのすべては、厳密な神の正義に耐え得ず、贖いの血を必要としていることは申すまでもない。

筆者は、以下で、ジョン・ウェスリが婚約者グレース・マリ、及び、妻メアリに示そうとした「純朴で、やさしく、へりくだった、忍耐強い愛」の歩みを見つめたい。また、妻メアリが「たびたび、許しなしに家を出る不本意な行動」に至った結婚生活ではあったが、彼女自身が、ついに夫の許を離れた決断も、夫自身の苦悩、自らを御し切れない性格と行動、さらには、メソジストの群れ全体について考えた末、メアリがたどり着いた結末ではなかったか。また、別居しつつも、何度か、夫のもとに戻って再出発しようとする実際のメアリの姿にも、彼女の「あるがままの生きさま」を見る思いがする。

もし、彼らの歩みの中に、さまざまな弱点、性格上の短所、重大な過失や判断ミスを見出すとすれば、そして、出来得るかぎり誠実に生きようとしながらも、弱さと挫折と過失の重圧にあえいだ暗闇の部分を見出すとすれば、わたしたちは、ただ、ふたりのためにこうべを垂れ、黙して祈りをささげるのみである。そして、「これらの第1次資料が示す彼らの生きさまは、一体、何であったのか。なぜ、彼らはそのように考え、行動したのか。ジョン・ウェスリの牧会伝道から生まれてきた神学思想に、それらはどのような関わりを持ったのであろうか。」を問い続けたい。解き難く思える軋轢の糸のもつれが、考察の積み重ねを通して、少しずつ、解きほぐされることを願いつつ。

I. ジョンとグレース・マリ (Grace Murray) の婚約をめぐる

(1) 出会いから婚約へ

1751年2月18日、あるいは、19日⁵と云われるジョン・ウェスリとメ

⁴ 同書、125頁。

⁵ 18日は、*Gentleman's Magazine* による、19日は、*London Magazine* による日付であ

アリ・ヴァジール夫人との結婚が、その、わずか1年数ヶ月前の、ジョン・ウェスリと婚約者グレース・マリとの別離と無関係であったとは、どうしても考えることが出来ない。そこで、まず、ジョン・ウェスリとグレース・マリの「婚約問題」について述べたい。

グレース・マリは、1715/16年1月18日、敬虔な国教徒であった父 Robert Norman, 母 Grace の娘として、ニューカッスル・アポン・タインで生まれた。18歳でロンドンに移ってメイドとして働いたが、1736年5月13日、スコットランド出身の船員アレグザンダー・マリと結婚した。1739年、夫が船出した留守中に、彼女は、ジョージ・ホウィットフィールドの説教を聞いてメソジスト運動に触れ、同年9月9日、Moorfields でジョン・ウェスリの説教を聞いて改宗するに至ったらしい⁶。メソジストへの入会を許したのは、チャールズ・ウェスリであったという。精神的な弱さを負い、活発な活動と、落ち込み、迷い、動揺に交互に悩まされたらしいが、そのような弱さにも拘らず、メソジスト運動の奉仕に励むようになった。活動や霊的な賜物が認められて、42年、グレースはロンドンのファウンダリで、既婚者のバンド・リーダーに任じられた。(その間、夫が彼女の信仰と活動による病の悪化を案じつつも、徐々に彼女への評価が高めたという見方と、逆に、メソジスト活動を迫害し続けたという見方がある。)

1742年、夫が海難事故で死亡した後、故郷、ニューカッスルのメソジスト児童保護施設の寮母、メイドとして働き、同所が、巡回伝道者のための保養施設を兼ねていたため、ウェスリ兄弟や、ほかの伝道者たち、後に結婚するに至ったジョン・ベネットの介護にも励んだ。

ジョン・ウェスリの『日記メモ、*London Diaries*』には、1739年8月1日(水)午後4時、グレース・マリと面談した(necessary talk, religious)とある⁷。出会いの最初の記録であろうか。翌40年、チャールズも彼女を指導しており⁸、ホウィットフィールドも彼女を導いている。彼女が、ジョン・ウ

る。

⁶ J. A. Leger, *op. cit.*, p.22.

⁷ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 19, p.401.

⁸ Gareth Lloyd, *Charles Wesley and the Struggle for Methodist Identity*,

ェスリ以外の指導者たちからも感化を受け、熱心な指導を受けていた事実を覚えておきたい。

(2) 婚約だったか、結婚だったのか

ジョン・ウェスリとグレース・マリの婚約をめぐるのは、ドラマティックな展開と、複雑な人間関係や状況が入り組んでいるのだが、その概略には触れておきたい。(a) ジョン・ウェスリの『日記』を読むと、1748年8月4日(木)から、2,3日間、彼はニューカッスルで体調を崩して臥せった。⁹当然、メイドであるグレースの看護を受けた。彼は、彼女を、そのロンドン時代から注目していたが、この時期に至り、彼女こそ、メソジスト運動の中心的指導者である自分の良い伴侶として、共に伝道に励んでくれるものと、考えるようになっていた。そして、ためらいながらも、「もし、自分が結婚するとすれば、あなたが、その相手です。」と語った。ジョンの申し出に驚きながらも、「わたしには、余りにも過ぎた祝福であって、なかなか信じ難いが、これほどの望みはほかにありません。」と喜ぶグレースを見て、彼女との結婚を願う思いは、さらに強まったという¹⁰。

(b) 「来春のアイランド伝道旅行には、あなたを伴いましょう。今、しばらく別れなければなりません、今度、会えば、もう離れることはありません。」と、ジョンはグレースに約束した。しかし、旅行への同伴を「すぐに」と乞うグレースの願いを受け入れ、ほかの男性伝道者をも同行させつつ、ジョンは、彼女をヨークシャー、ダービーシャーへの伝道旅行に同伴した。この旅の途中、かつて、ハンティントン伯夫人から紹介されたジョン・ベネット (John Bennet) ¹¹と出会い、彼とグレースをチェシャーに残して、ウェスリは、喜びと希望に溢れつつ、伝道旅行を続けて行った。だが、何という

Oxford University Press, 2007, pp. 97-109.

⁹ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol.20, p. 237.

¹⁰ Frank Baker “John Wesley’s First Marriage,” *London Quarterly and Holborn Review*, Vol. 192, No.3, Oct.1967 に詳しい。

¹¹ ジョン・ベネットについては、以下の文献がある。*Mirror of the Soul The Diary of an Methodist Preacher, John Bennet: 1714-1754* (ed.) S. R. Valentine, 2002. および、S.R.Valentine, *John Bennet and the Origins of Methodism and the Evangelical Revival in England*, Scarecrow, 1997.

ことであろうか。ウェスリ自身、その時点では知るよしもなかったが、実直で優れた青年伝道者ベネットも、実はグレースに愛情を寄せ、グレースも彼に好意を抱いていたのである。

ジョン・ウェスリは、しばらくして、ベネット自身と、グレースから手紙を受け取る。しかも、ベネットは、ウェスリにグレースとの結婚の許可を求めた。ふたりのジョンからの求婚を受けて戸惑いを覚え、両者の間を、グレースの思いが往き来したところで、誰が彼女を責め得ようか。

彼らが既に結婚したと、一時、勘違いしたジョン・ウェスリは大きなショックを受けるが、メソジストの指導者らしい柔和に満ちた返事を兩人に書く。事情は複雑であるが、グレースは、指導者からのこの手紙を読んで、逆に、生死が自分たちを分けるまで、ジョン・ウェスリの妻として生き抜きたいと願うようになった。さらに複雑な事情が追い打ちをかけるが、それらは省略して 1749 年春に目を向けたい。

同年 4 月 8 日、ジョン・ウェスリは、先に、その結婚に賛成し、祝福していた弟チャールズとセアラ・グインとの結婚式を司式した。続いて、ジョンは、4 月 15 日から 7 月 24 日までの「第 3 次アイルランド伝道」にグレースを同伴した。その頃には、ブリストルをはじめ、各地のメソジストたちも、徐々にではあるが、ウェスリが同伴するグレースの存在を知ることとなっていた。ある研究者は、ジョンとグレースとは、「口頭で交換する結婚の誓い (de praesenti)」を、7 月 5 日ごろ、ダブリン滞在中に交わしたと考え、当時の結婚制度から見て、ここで彼らの事実上の結婚が成立していると解釈する。¹²当然、異なった解釈も存在する¹³。

(c) 1749 年という時期は、1754 年の「ハードウィック法」施行以前であったので、教会における 3 週間の公告などは必要でなかった。彼らが交わした口頭誓約によって成立した「婚約、あるいは、結婚」が有効だとすれば、それを理由に、ウェスリは、後日、ジョン・ベネットとグレースを、その不

¹² Frank Baker, *op. cit.* が、その解釈を採る。

¹³ 異なった解釈としては、Frederick E. Maser, "John Wesley's Only Marriage: An Examination of Dr. Frank Baker's Article John Wesley's First Marriage," *Methodist History*, Vol. 16, No. 3, Oct., 1977, pp. 33-41.

履行ゆえに訴えることも可能であったが、「婚約不履行問題」が法廷に持ち込まれることはなかった¹⁴。

「婚約であったか、結婚であったか」をめぐる研究者間の解釈の違いは、当時の結婚制度の法的な研究においても存在するという。第18世紀の結婚制度に関する法的解釈は、暗いジャングルをさ迷う旅に似ていると表現される。しかし、「口頭で交換する結婚の誓い」が、*de futuro* としての結婚式を待たずとも、「証人のもと、相互の誓いの言葉だけで結婚が成立した」のであれば、確かに、ジョン・ウェスリとグレース・マリとは、単なる婚約ではなく、「唯一の結婚、あるいは、最初の結婚」をダブリン滞在中に行なったことになる。ただ、彼らがそれを事実婚だと受け取っていたとしても、伝道旅行中の肉体関係はあり得なかったと解釈する点では、研究者の意見は一致する。では、なぜ、ジョンは、グレースとの挙式に至らず、また、事実上の結婚生活に入らなかったのでしょうか。

研究者たちによれば、それは、ジョン・ウェスリ自身が自分たちの挙式に至るまでに「三つの同意を得ようとしていたから」に他ならなかったという。

(3) 三つの同意、あるいは、祝福をめぐる

ここで、それまでの「主の御業を進めるための独身尊重の生き方」から大きく変わろうとしていたジョン・ウェスリは、(a) まず、同じように、グレースとの結婚を願っているジョン・ベネットの心からの同意と祝福を得ることを願ったらしい。(b) 同時に、自分の大切な同労者である弟チャールズのよい理解と同意を、弟や他の伝道者ちと交わっていた約束の通りに、受け取れることを願っていた。(c) さらに、群れとして大きな転換期を迎えようとしている「メソジストと呼ばれる人々」全体からの祝福を受けたいと願った。

実際、ウェスリが、これらの同意を得るために、どれほど積極的に努めたかを疑問視する見方もあるが、事を慎重に進めようとした余り、結果としては、それらの努力がすべて水泡に帰する状況となっていたのではないか。

(4) 悲しい結末に向けて——ジョン・ベネットとグレース・マリの結婚 その後の状況は、ジョン・ウェスリが想像もしなかった方向へと急速に向

¹⁴ Baker も Maser もこの点を指摘する。

かって行く。しかも、上記の同意を、条件として果たそうとするウェスリの配慮と努力とが、自らの結婚への道を阻んでしまう結果につながって行く。その上、「嘆きの淵に突き落とされた悲しみと失意を繰り返すまいとする思いと行動」が、1年半後の、メアリ夫人との結婚という「唐突さ、性急さ」につながって行ったと、筆者には思われてならない。

当時、すでにホウィットフィールドのカルヴァン主義的な傾向に賛同し、ウェスリ批判を強めていたベネットであったが、メソジストの伝道者としての規定に従い、グレースと結婚したい旨を、繰り返し、ジョン・ウェスリに申し入れた。しかし、ウェスリにすれば、グレースとは、「すでに婚約が成立している」という確信があった。また、この間のベネットの心情を知らず、また、グレースの内心の迷いや逡巡に、深い関心を抱いていなかったウェスリは、ベネットの願いを無視していた。さらに、「自分と彼女との付き合いは、すでに10年前から続いてきたものである。」ことを明らかにして、ベネットに結婚の断念を迫る抗議の手紙を書き、1749年9月7日、それをリーズの信徒伝道者シェント（William Shent）に託して、わざわざ、個人的に必ず届くように計らった。ところが、託されたシェントが大切な手紙をベネットに届けなかったという重大なミスまで重なり、誤解と混乱とが渦巻くことになってしまった。

この混乱の合間を縫うように電光石火の行動を取ったのが、弟チャールズとホウィットフィールドの二人であった。まず、兄とグレースとの婚約が、ベネットとグレースとの先約（チャールズはそう誤解してしまっていた！）を踏みじめるものであると信じ込んでしまったチャールズにとって、兄は、メソジストの群れの責任者でありながら、補助者であり、同労者であるベネットとグレースの「愛の交わりを横取りする暴徒」に見えた。兄は彼らの愛を破壊する者であると断定せざるを得なかった。しかも、彼ら兄弟の対立の背景には、当時のメソジスト運動の問題点が影を落としていた。

当時、メソジスト運動は、大きな曲がり角に立っていた。兄のジョンは、『日記』や『年会記録』が示すように、国教会からの分離問題について樂觀的であったらしい。しかし、国教会からの離反を主張する群れの声が増しに大きくなっていると、彼らに反対するチャールズは憂慮していた。形成期

から過渡期への曲がり角に立って、メソジスト運動が一致団結して、国教会からの分離問題を退けるべきときに、メソジスト運動全体に悪い影響を与えるような出来事が起こることは、何事であっても断じて許す事が出来ない。それが、チャールズの確信であった。

このような時に、同派施設の寮母に過ぎないグレース・マリが、「中心的指導者ジョン・ウェスリの伴侶として、メソジストの群れにいる多くの婦人層を率いていく指導的な器」となることは、それでもなくとも激動し、混乱を招き易いメソジスト運動にとって、決してよい結果を生まないとチャールズは考えたのであろうか。兄の結婚問題に対する、度が過ぎたと思われる介入は論外としても、メソジストの群れ全体を憂慮するチャールズの思いが、まったく見当外れのものであったとは、考えることが出来ない。

具体的なチャールズの介入についてであるが、上記のセントに託された兄の「ベネット宛の手紙の写し」を、兄から受け取って読んだチャールズは、直ちに行動を起こす。また、第3次アイルランド伝道旅行からブリストルに帰着したあと、グレース・マリ自身も、ウェスリの女性問題についてのゴシップを耳にして、心悩まされ、それがベネットへの思いを再燃させていた。

49年9月6日、ジョン・ウェスリは、ニューカッスル・アポン・タインに到着した直後、グレースに「ベネットを選ぶか、自分を選ぶのか」を問うた。「良心に従い、あなたと生死を共にすることを決心しています。」が彼女の答えであった。そこで、その翌日、上記のベネット宛の手紙を書き、必ずベネットの手に渡るようにと、セントにそれを託したわけである。

他方、兄とグレースとの婚約を放置することは、「メソジストの群れ全体に取っての一大事」と、絶交を口にしながら、兄を責め続けるチャールズは、馬で Hindley Hill に赴き、そこで兄との結婚を説得させられたグレースを馬に乗せて出発した。ジョンが同地に到着した時には、彼らは出発した後であった。さらに、チャールズは Newlands で彼女を待たせたまま、躊躇するベネットを説得し、ふたりを会わせて、10月3日、ニューカッスルで結婚式を挙げさせてしまった。ジョン・ウェスリにとっては、これまでの人生で最悪の状況を迎えたことになる。彼は悲しみに打ちひしがれて体調を崩してしまい、伝道に励みつつも、悶々とした日々を過ごす。

なお、チャールズの日記も、ベネットの日記も、この期間の記述を残していない。ジョンの内心の激しい動揺や、溢れる悲しみは、9月25日付けのチャールズ宛の手紙と¹⁵、レジェが引用する、ジョンによる『31節から成る6行連詩』が、もっともよく表わしているのではないか。この『連詩』は、リーズからニューカッスルへ馬を駆りながらの傷心の旅の途中、ジョンが祈りつつ詠んだものである。暗い淵からの「主に砕かれた魂の叫び」であるが、なおも、主なる愛の神のみを仰ぎ求める信仰に溢れた詩である。父サミュエルも、兄サミュエル・ジュニアも、弟チャールズも、共に優れた詩人であった詩人一家から生み出された、優れた祈りの連詩である¹⁶。

10月6日、一同はリーズで出会い、抗議と非難の応酬のすえ、ついには涙のうちに、ただ抱き合うだけであったという。しかし、チャールズたちによる、兄やメソジストの群れを思う余りの行動とは言え、兄弟にかなり冷え切った相互関係を生み出してしまった。そして、それが、一年余を経ぬ時期に、今度は、弟の同意をまったく無視して、兄のジョンが、突然、メアリ・ヴァジール夫人と結婚してしまうという出来事を導いてしまったのである。これら二つの出来事には、深い関係があるに違いないというのが、筆者の解釈である。

(5) その後のベネット夫妻の歩み

上記の状況をめぐって、人々の多くは、ジョン・ウェスリへの同情に傾くが、当然、ベネットたちにも彼らなりの言い分があったと思われる¹⁷。

ベネットは、3年後の1752年、メソジスト・コネクションを離れ、¹⁸Warringtonで独立派の牧師となる。Tyermanによれば、ベネット夫人は、結婚直後、ジョン・ウェスリに会い、種々、弁解を試みたという。また、ある人の仲介によって、1788年、再び、彼女とウェスリとの出会いが試みられたが、それは、物静かで寂しいものであったと云われる。

1759年、夫の死後、1803年の彼女の死に至るまで、彼女はメソジストの

¹⁵ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol.26, pp.380-387.

¹⁶ J. A. Leger, *op.cit.*, pp. 98-105.

¹⁷ John Bennet, *op. cit.*, p.194.

¹⁸ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 20, p.413

群れに復帰し、その一員として尽力した。その葬儀説教は Jabez Bunting が行った。¹⁹

II. ジョン・ウェスリとメアリ・ヴァジール夫人との結婚

(1) 「唐突な結婚」に至る経緯

一つの手紙に注目したい。1750年6月19日、アイルランドのダブリンから、ロンドンのスレッドニードル通りに住むメアリ・ヴァジール夫人へ宛てた、ジョンからメアリへの最初の手紙である²⁰。ヴァジール夫人は、当時、ジョンよりも7歳年下の40歳。ユグノーの流れを受けたロンドンの富裕な商人ヴァジール氏の未亡人であったが、いつごろ、メソジスト会員になったのかは不明である。

チャールズの『日記』を読むと、メアリは、チャールズらと共に旅行をしていた。5月31日に町へ到着し、6月2日から8、9日間、チャールズたちに加わって、ラドローとその付近の旅行を楽しんだ²¹。その旅行のことを伝え聞いたジョンが、メアリに宛てた手紙が上記の手紙である。彼は夫人に対して好意をもって書いたと思われる。実は、チャールズたちが、その旅行を通じて初めて知らされ、驚かされた「メアリの感情的起伏の激しさ」は、当時、ジョン自身は知るよしもなかった。

事態は、ジョンが起こした転倒事故と捻挫から、急な展開を見せる。1751年2月10日、主日朝、礼拝への道を急ぐジョンは、氷結したロンドン・ブリッジで転び、くるぶしを捻挫してしまった。それでも説教のために急いだ無理のせいか、彼は、同日、近くのヴァジール夫人宅に椅子ごと運ばれ、そこで静養させてもらうことになった。祈りと会話と執筆（ヘブライ語文法と、子どもたちへの教本）で過ごす1週間であった。

そのジョンが、弟チャールズにも相談することなく、まったく唐突に、1

¹⁹ *Ibid.*, p.301.

²⁰ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 26, pp. 429-430.

²¹ *The Manuscript Journal of the Reverend Charles Wesley M.A.*, (eds.), S. T. Kimbrough, Jr. and Kenneth G. C. Newport, Vol. 2, p. 594, 2007.

週間後の18日、あるいは、19日に、ふたりの結婚式を挙げたのである。結婚の公告書は残っていない。

それに先立つ2月2日の『日記』に注目したい。「ペロネ君から十分な返事を受け、わたしは結婚すべきであると確信した。長い期間、独身を守ってきた。独身の方が、より奉仕に役立つと信じてきたからである。そして、そのように導かれた神さまをほめたたえる。しかし、今は、わたしの現在の状況下では、結婚をした方が、さらに有用な働きが可能であると確信したので、この考えに立ち、友人たちの忠告をも受け入れて、数日後に結婚生活に入ることになった」²²。

さて、ジョンが、チャールズに結婚と結婚相手について相談せず、同意を得なかった事実は、彼がチャールズによってグレース・マリと引き離された時、弟から受けた厳しい仕打ちから受けた心の傷が、いかに深かったかを物語っていると考える。もちろん、この結婚は、ジョン・ウェスリ個人の事情と判断によるものである。しかし、ある大きな挫折経験で受けたショックや傷がもとになって、その後、唐突とも、無謀とも思える行動を生む例は、決して彼ひとりではなく、往々にして起こり得る事柄ではないだろうか。

チャールズ自身は、自分は結婚生活を始めたが、兄は、恐らくメソジストの群れの最高指導者として、生涯、独身を貫くであろうと考えていた。ところが、その兄から結婚への意思が強いことを知らされて驚き、さらに、追い打ちをかけるように、結婚相手がヴァージール夫人であると聞いて、びっくり仰天した。彼の『日記』が示すように、チャールズ夫妻のショックの大きさは、知らせを受けた後、数日間の悲痛の激しさを知れば、容易にうなずけるところである²³。

ジョンにすれば、チャールズの「自分とグレースとの結婚への反対理由の一つ」が、グレースの「メイドという身分」にあったのだから、ヴァージール夫人なら、この点でも有資格者として認められるに違いないという言い分であったのかも知れない。しかし、チャールズたちは、短期間ながら、一緒に旅行をした経験から、メアリの性格は、兄とは不一致であると確信していた。

²² *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 20, p.377-378.

²³ *The Manuscript Journal of the Reverend Charles Wesley, M.A.*, Vol.2, pp.602-603.

早晩、両者が激突するであろうことが予測出来た。しかし、兄の結婚はすでになされた！落ち着きを取り戻したチャールズ夫妻は、義姉メアリとの和解の努力を続けることになるが、結果的には、チャールズが、ジョン夫婦のいさかいの一因になって行ってしまった。

さて、チャールズによる激しい怒り、悲しみ、反感とは逆に、深い事情を知らなかった長姉、エミーリア・ハーパー夫人は、心のこもった手紙をジョンに送っている²⁴。1751年2月16日付けの手紙である。チャールズの思いも、エミーリアの思いも、共に、兄を思い、弟を思ったウェスリ家族の親密さの一端を示している。確かに、エプワスの司祭館で共に育てられた家族として愛の連帯を示しているが、同時に、家族愛ゆえの過干渉や限界も垣間見ることが出来る。

結婚直後のジョンは、2月19日と20日には、立つことが出来ないで、跪いた形で説教者のつとめを果たした後、馬には乗ることが出来るというので、新妻をロンドンに残したまま、二日間の乗馬で、ブリストルでの説教者会議に出かけた。また、6日後、ロンドンに帰った彼は、今度は、メアリを連れてイングランド北部からスコットランドへの伝道旅行に出かけた。

彼は2月19日の『日記』にこう書いている。「メソジストの説教者たる者が、結婚したからと云って、独身の時よりも説教を一回、減らしたり、旅行を少なくするならば、神様に何と申し開きするのか。わたしには分からない。その意味で、確かに『妻のある人はない人のように』(第1コリント7:29)すべきである。」²⁵ 意気軒昂な巡回伝道者として、伝道者の鏡のような態度と発言であり、「妻のある人はない人のように」生きる姿はすばらしい。しかし、ジョンの妻、メアリは、そのような夫の生きさまをどう考え、受け止め得たのであろうか。彼女自身も、結婚当初には、健気にも、長途の伝道旅行に加わった事実を、決して忘れてはならない。しかし、そのような生活に、ずっと耐え得たのであろうか。メアリの努力を評価しつつも、近づく彼女の限界を予感して、一抹の不安を抱かざるを得ない。

チャールズ夫妻も、結婚した当初は、共に巡回伝道を試みている。しかし、

²⁴ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 26, p. 449.

²⁵ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 20, p.380.

子どもが生まれ、妻セアラが育児に忙しくなればなるほど、彼らは、巡回計画そのものを考え直さざるを得なくされた。巡回旅行の試練に、ジョンとメアリも直面せざるを得なかったのではないか。もちろん、ジョン・ウェスリ自身、そのような旅行に妻の身心の健康が耐え得るか。また、いつ襲ってくるかも知れない暴徒の危険が、彼女の身に及ばないか。それらを案じている。しかし、ジョン夫妻に対するさらに厳しい試練が、蜜月時代を通り過ぎた彼らを待ち受けていた。それは、外からの暴力や圧迫ではなく、内からの愛憎問題であった。

(2) 愛情豊かな時期 (1752 年ころ) から、嫉妬、不信、反抗の時代 (1764 年夏ころ) へ

Ken Collins 教授の研究によれば、1752 年ころ、すでにこの夫婦に転機が訪れたとされている。²⁶ 蜜月時代にジョンがメアリに送っている、愛情に満ちた「親しい会話のような手紙」が、数通、残されている。その中からの 1751 年 3 月 11 日付けの手紙を読みたい。(以下、{ } は、訳注と挿入。)

「愛するモリー、金曜、土曜、日曜、月曜と、この 4 日間も、終日、わたしにひとこともしゃべらないで過ごすことが出来ますか。しかし、あなたは辛抱強くなかったとしても、このわたしをゆるしてくれることでしょう。あなたと一緒になかったとしても、わたしはあなたに話したいと思っています。今、わたしに許されている唯一の方法で、わたしはあなたと話し合いたいと思っています。体調はすこぶる順調です。従って、あなたへの愛も同様です。神様がその御ころ通りをおこなってくださいますように！ああ、キリスト様がわたしたちを愛されるように、わたしたちお互いも、つねに愛し合い続けて行けますように！

あなたは、その時、その時の仕事を、おろそかにしてはいませんか。スペインへ宛ててもう書きましたか。宝石類は売りましたか。【財産管理人】のブリソン (Blisson) さんと相談して決めましたか。愛する {義理の娘} ジェニー (Jenny) とは、その後、うまくやっていますか。貧しい人々のことを忘れてはいません

²⁶ Kenneth J. Collins, "John Wesley's Relationship with His Wife as Revealed by His Correspondence." *Methodist History*, 32, Oct., 1993, pp.4-18.

か。刑務所への訪問を続けていますか。わたしが、余りにも多くの仕事をあなたに課していると、どうか怒らないでください。あなたの全生涯が、信仰の業と、愛の労苦とで満ちあふれることを、わたしは願っているのです。主がわたしたちのために行ない、苦しんでくださった余りにも多くのことに比べると、主のために十分なことをやり遂げたなどと言うことが出来るでしょうか。あなたも主のために喜んで苦しみたいと願うのではありませんか。御自分に対する罪びとたちの反抗を忍耐された方のことを考えますか。主の賢明な御摂理があなたの上に課すことを許したことを、きっとあなたは喜んで負い行くに違いありません。祝福の祈りとともに、どうか、あなた自身のところがあなたに、わたしの感じていることを告げてくれますように！

(Edward Perronet {1721-1792, エドワードの弟チャールズと共に、メソジストの伝道に尽力した。後年、ハンティングトン伯夫人付きの司祭} の手によって次の文章が加筆されている。)「ああ、あなたのために多くのことをして下さった御方、主のために、あなたが余りにも多くをすることが出来るなどと、決してお考えになりませんように。わたしの義務と愛とは、あなたとご主人様のふたりとに仕えることであります」²⁷。

以上の手紙が示すように、次々と、手紙を書き送って愛情の深さを覗かせるジョンは、メアリが清潔好きで、事務処理能力にすぐれ、また、さまざまな人々とのやりとりにも有能なことに満足している。しかし、彼女は、やがて、伝道旅行に同行することの無理を知り始め、ひとりで留守の責任を負う辛さからか、あるいは、持ち前の嫉妬深さからか、夫の女性関係に対して、不信任感を抱き始め、やがて、それは、ジョン自身への不信へと深まっていった。女性との会話の機会が多い伝道者が留意しなければならない大切な課題であろう。メアリは、嫉妬のあまり、夫を攻撃し始め、そのような軋轢が拡大して行った。

彼の手紙を読む限り、ジョン・ウェスリは、誰に対しても、女性に対しても愛情豊かな手紙を綴る人物である。メアリが特定したふたりの女性の側にも、問題がなかったわけではなからう。だが、メアリの不信任感と激しい嫉妬は、さ

²⁷ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 26, pp. 451-452.

らに憶測を生み出し、不幸な悪循環を起こしてしまった。

相互不信と対立が強まった時期の手紙、1759年4月9日と、同年11月24日の手紙を読みたい。

「愛するモリー、もう一通、書かねばなりません。その後、あなたから何の返事がなくても、わたしは書くことにします。

約1年前、そのころのわたしは、何の疑いをも抱いていなかったのですが、あなたはわたしの机をこじ開けて、わたしの多くの手紙や書類を取り出したのです。ブラックウエルさんが助言して言うのに、もし、あなたがわたしの手紙や書類を返すことを拒んだならば、あなたの前で、すぐに机をかじ屋に持って行き、机をこじ開けて書類を取り戻しなさい、とのことでした。{それらをひそかに戻すのを差し止めるためであろうか。}

しかし、あなたは、また、すぐに手紙類を盗み出しました。そして、20人以上の人々に、わたしの私的な手紙を見せて、わたしに悪評を立たせようとたくらんだのです。同じ目的を果たすために、あなたは、わたしが数百マイルも離れたところへ旅をしている間に、わたしのことを散々、悪く言いふらしました。

あなたの口実は、わたしがライアン姉妹(Sister Ryan)やクロスビー姉妹(Sister Crosby)と話し合ったから、というもの。それがただの口実に過ぎないことは、よく分かっています。ですから、あなたの友人には、ユーモアを込めて、彼女はそのようなことに、余りかかわらないでしょうと言っておきました。わたしは、1杯の飲み物を差し出しただけで、水腫を治すことが出来るなどと考えていません。しかし、色々な状況で色々な実験をして見ます。ですから、手紙も会話もすべて止めて見ました。しばらくは、実験は成功でした。あなたはご機嫌を取り戻しました。しかし、その後、あなたは、わたしが考えていた通りになったのです。あなたは、また、わたしのものを盗み出したからです。以前と同様に、あなたの罪は裁きを招き、盗み出した書類のことで、あなたの魂は悩み、怒りっぽい心は、粉々に碎け散ったからです。

それにもかかわらず、あなたは2通のすばらしい手紙をわたしに書いてくれました。(わたしがそれらを誰かほかの人々に、読み聞かせるかも知れないからと考えた上での手紙でなかったことを願っています。わたしは、あなたが、これらの手紙の一部か全部を、ほかの人々に見せ、読み聞かせなかったかと、わ

たしに念を押すことにも、別に疑いを挟んでいませんでした。) ですから、コルチェスター (Colchester) で、久しぶりに会った時、あなたが大いにご機嫌斜めであることを知って、少し、驚かされたのでした。わたしには、あなたが盗み出した書類のゆえに、あなたの心が騒ぎ立っているかのように思えたのです。ですから、ほかの人々と一緒にいる時でも、わたしたちだけの時でも、怒りを爆発させて、わたしに爆竹を投げかけることによって、あなたは決して問題を解決出来ないのです。{義息} ノア・ヴァジールに対しても、静かに教え諭すしかないように、どの妻も夫に対して、そのように振舞うしかありません。

確かに、あなたは今や、より大きな自由を取り得るかも知れません。わたしの書類によってわたしを裸にし、どう見てもわたしが自分を正当化できないだろうとふんでいるのだと思います。しかし、あなたは間違っています。わたしのことを知ってくれているすべての人々に取って、わたしの言葉だけで十分なのです。もし、何かほかのことが必要であるというのなら、それは墓を超えて語りかけたもう御方[復活の主]が、「返しなさい。」と言っておられることを知っているという一事です。そうです。その御方が、墓場としての冷酷、嫉妬に対して言いたもうならば、{嫉妬さえ、} 主の御声に聴き従うことでしょう。

今、あなたが何にも増して求めている御祝福、すなわち、真実で深い悔い改めに満たされることを願いつつ²⁸。

「愛するモリー。今朝、あなたのことをずっと考え続けていました。わたしが考えたことを話してもよいですか。善意で受け取って聞いてください。心を込めて書いているのですから、快く受け入れてください。

わたしの書類を手に行っていることで、あなたには何か益することがありますか。あるいは、少なくとも、あなたは益であると思っていますか。では、その理由は何ですか。それらの書類を、その一部を、ほかの人々に見せることで満足を得るのが益ですか。あなた自身を正当化する力を得ることが出来、わたしを傷めつけることが出来 (少なくとも、わたしを苛立たせることが出来て) 益をもたらしますか。人々がわたしを悪く思うようになり、それらの書類が、あ

²⁸ *The Letters of the Rev. John Wesley, M.A., (ed.). Vol., 4, pp.61-62.*

あなたを良いように思わせることが出来て、益になるのでしょうか。その結果、あなたはより多くの友を得、逆に、わたしは多くの敵を得るようになります。

とても結構なことです。しかし、それはあなたにとって、確実なことでしょうか。それらを見せることで、あなたに益がもたらされるということは、純粋な満足をもたらしていますか。自分は正しいことをしているのか否かという疑い、あるいは、満足感を害するようないそやかな不安が、しばしば、あなたを襲わないでしょうか。それらの書類を見せることで、それらを持ち出したあなたを正当化できますか。罪に罪を重ねることになりませんか。この世の人々でさえ「ああ、これは何という悲惨なことか。まず、盗み出し、次に、彼女自身の夫をすっぱ抜くとは！」と言わないでしょうか。それゆえ、もし、あなたがわたしを悪く思わせるとするなら、あなたは彼らにあなた自身をよく思わせることは出来ないのです。わたしの敵を増やすということは、あなたにもう一人の友を増やすことにはなりません。いいえ、すべてこれらのことの後には、あなたはより多くの友を失っている筈です。

しかし、もし、あなたが予想しているような益があったとしましょう。それらは、それによってあなたが失ったものを取り戻していますか。あなたはわたしの敬意をまったく失わせています。あなたはわたしの愛を打ち壊してしまっています。わたしの確信をまったく崩してしまっています。あなたは、盗人に備えるように、わたしがすべてのものに鍵をかけざるを得ないようにし、いつも自分のものを警戒するようにさせ、あなたがわたしに近づくときには、次には、何を知らない間に盗み出して世の中にそれを示すのだろうかかと気をつけるようにさせてしまっています。共に祈ることから、あなた自身を切り離してしまっています。なぜなら、わたしはどうして、日々、害を加えられはしないかと警戒していなければならない相手と共に祈ることが出来ましょうか。それがなければ、あなたと楽しく語り合い、あなたに仕えることを喜ぶ多くの人々との親しい会話を、あなたの方から切り離してしまっているのです。あなたは礼拝に参加し、主の晩餐のテーブルに近づくすばらしい機会を、あなたの方から奪っています。さて、あなたは、これからもそのような大きな犠牲を払って、なおも自分を正当化し、わたしのことを悪く言うことを好み続けなければならないのでしょうか！ああ、モリー、あなたの心の奥底に抱き続けている炎を投げ捨て

なさい。それらの炎をかきまわすへびになることを止めなさい。真実な光のもとで、「あなたを愛する夫」を見つめなさい。ロンドン、ファウンダリのウェスリ夫人へ」²⁹。

これらの手紙だけでなく、現在、入手可能なジョンからメアリへの手紙を読んで知り得ることは、ジョン・ウェスリの「人となり」である。彼は、やはり、自分の生きさまに対して根本的な原則を保持しており、決して、それを譲ろうとしない。それらは幼い時から、エプワスの司祭館で培われたものであろう。さらに、メアリに対する警告と叱責の中にも、出来る限り、互いに赦し合い愛し合って、過酷な状況を乗り越えて行きたいという愛情と希望が失われていない。例えば、時期は前後するが、急病で弱る妻を覚えつつ書いた手紙、1768年9月5日の手紙を読めば、彼の切実な思いは一目瞭然であろう。

「わたしは、無力さ、弱さ、痛みなどを、考慮に入れることができます。それは、まさに、この町でのわたし自身のことであることを覚えているのですが、あなたは、神様の御心によって、わたしの健康回復のための、おもな器として用いられ、わたしを看護してくれ、付き添ってくれました。あなたが有能な医師のような助言をしてくれたことをありがたく思っています。しかし、あなたがすぐに良くならなくても、特に、今年のこのような時期に、ほかの人も望むように、すぐに良くならなくても、決してショックを受け、がっかりしてはいけません。求めなければならない肝心要のこととは、神様がすべての御摂理を働かせてあなたをきよめてくださることであり、すべては、あなたが主にまったくさげつくす手段であるということです。神様の御愛顧は、力や健康やいのちそのものよりも、もっとすばらしいものです。最愛の夫より、愛するモリーへ」³⁰。

さらに、自分がメソジストの群れに牧会者として遣わされているという自覚と使命感とを、どんな苦境に立たされても、彼は決して失っていない。夫婦間の事態がいかに深刻であっても、そのことのゆえに、伝道活動がおろそかにされる点が見当たらないのである。彼は、「いつものように、今も」、主と人々の

²⁹ *Ibid.*, pp. 79-80.

³⁰ *The Letters of the Rev. John Wesley, A.M.*, John Telford (ed), Vol., 5, p.105.

魂の救いに仕え続けた忠実な伝道者であった。

(3) 断絶から別居生活を経て (1764 年～1774 年) 妻メアリの死まで (1781 年 10 月)

ジョン・ウェスリは、その晩年、結婚生活を振り返って米国のジョン・ディキンズ牧師への手紙でこう述べている³¹。

「わたしは、結婚しましたが、それはわたしの健康を快復させるためのホームを必要としたからです。しかし、そのことによって、幸福を求めようとは、しませんでしたし、それを見出すこともありませんでした。わたしたちは、既婚者であれ、独身者であれ、神様を知ること、神様を楽しむこと、神様に仕えることに幸福を見出し得ることを知っています。しかし、わたしたちが自らを否み、主のために十字架を取り上げるとき、この地上にあっても、永遠の御国にあっても、より幸せであるに違いありません。そのように、働き続けましょう。主の時に、主は十分に報いてくださるからです。あなたの愛する友、兄弟より。」

さて、ハイツェンレイター教授も引用する 1774 年 7 月 15 日の手紙は、これまでの結婚生活を振り返り、順序立てて叙述したものである³²。娘のもとへ向かって、ジョンのもとを「去った」メアリと云うが、彼らの別居は複雑なものであった。メアリは、たびたび、夫のもとへ帰ってきていたからである。

ふたりの関係について、心を傷める多くの人々、特に、ヴァージル夫人の娘、スミス夫人とその夫が、労を取っていた。事実、黙って去ったメアリが、また、黙ってロンドンの自宅に帰ってきたとき、ジョンはやさしく受け入れたし、共に、ブリストルやほかの場所に旅行したりしているからである。特に、1772 年 6 月 30 日の『日記』に注目したい³³。

ヴァージル夫人の娘や息子たちは、義父であるジョン・ウェスリに対して好意を抱いていたようである。理由の一つは、財産家であった夫人や遺児たちの財産に対して、ジョンがまったく関わろうとしなかった点を挙げ得る。同時に、彼らなりに、義父の人となりに尊敬を抱き、「母と義父との間が、何とかうまく

³¹ The Letters of the Rev. John Wesley, A.M., (ed.), John Telford, Vol. 8, p.223.

³² Richard P. Heitzenrater, *The Elusive Mr. Wesley*, 2nd ed., 2003, pp. 181-185,

³³ *The Works of John Wesley (BE)*, Vol. 22, p.339.

行くように」と願っていたらしい。特に、自宅に母親を受け入れることになった娘、ジェーン夫人と夫が、そのような「和解への援助の役目」を果たしていたと思われる。

ほかに、ジョンとメアリに対し、信仰と愛と良識をもって、和解の道を歩ませようとしていた人々の中に、長年にわたって、ジョンとチャールズの運動を支援してきた銀行家、エベニーザー・ブラックウエル夫妻がいた。同氏夫妻との40年余にわたる「主にある交わり」は、ジョンやメアリの歩みが、決して孤立したものではなく、周囲にある家族、親族、友人、特に、メソジストの群れの中で生まれ、執り成しを受けていたことを示す。1759年3月2日付けの、ブラックウエルからジョンへの手紙を読もう³⁴。

「拝啓、2日付けのお手紙を拝受しました。わたしには、あなたのような生き生きとして、しかも簡潔な話し振りが、書き方も出来ませんが、出来得るかぎり、お手紙の内容を追いつながら、率直にお答えしたいと思います。

第1に、わたしは、あなたがた、おふたりのお役に立たないならば、少なくとも、どちらかのお役に立たないならば、あなたと奥様との仲裁の労を取るつもりはありません。はっきりと申しますが、あなたか、ウェスリ夫人のご要望によらないで、一方のことを他方に語ったことはありません。それゆえ、あなたが夫の権威を大いに主張されることを、少しも妨げたことはないことをご確認ください。それは、あなたであっても、誰であっても、当然、良識のある人なら、誰でも主張していることなのですから。

同様に、わたしは、自分がウェスリ夫人、あるいは、わたしを騙そうと計る誰かの相手であると考えたことがないことを申し添えます。しかし、奥様が言葉巧みに、賞賛に値するふたりのご婦人のことを悪く思い込ませようとなされたことは、決してありません。ふたりのご婦人とは、ライアン夫人とクロスビー夫人のこととお気づきでしょうが、わたしはライアンさんのことはまったく知らず、出会ったこともなく、彼女のことは、あなた以外、ほかの誰にも話したことがありません。クロスビーさんについては、いつかあなたがお手紙に記

³⁴ *The Letters of the Rev. John Wesley, A. M.*, (ed) John Telford, Vol.4, pp. 52-53.

しておられたので知っている程度の名前にしか過ぎません。そのお手紙に引用された彼女の書き方で分かったことですが、良識のある人なら誰しも、彼女はあなたがおっしゃるほど賞賛に値する婦人ではないと認めるだろうと思います。付言をお許しいただけるならば、彼女は、わが愛する友に対して、あまりにも技巧的過ぎるのではないかと案じます。

このような書き方を敢えていたしますのも、わたしがあなたご自身のことを、いかに真剣に考えて来ているかを示すものとして、ご了解くださると確信しています。わたしは、腹藏なく申しあげているのですから、ほかの多くの人々が表現されるよりも、少し気ままに記していましたら、ご自分に対して厳しい人物だとお考えなさらないようにお願いします。それは、わたしがいつもあなたとウェスリ夫人との間に、揺るがない平和が打ち立てられるように願っているからにほかなりません。なお、わたしは、あなたがロンドンを出発してお帰りになるまで、奥様にはお会いしなつもりです。お帰りになったあとも、あなたのご不快を招くようでしたら、お会いしません。

ですから奥様には、わたしに対して、会員の誰彼の欠点をあばく機会がないはずですが、たとえ、あったとしても、わたしは、奥様にそのようなことをさせないつもりです。先生、実際、もし、わたしが奥様にそのようなことを仕向けるようなことをしたら、自分の魂を、ひどく損なうことを、よく存じています。

しかも、何と悲しいことでしょうか。わたしは、たとえ、その件について、わが愛する友を責めることがなかったとしても、自分の魂を、たびたび、ひどく損ない続けているのです。しかも、はっきりと申し上げざるを得ないのですが、あなたがおっしゃったこと、令弟チャールズ先生についてわたしが見聞きすることが、わたしの弱い魂を悲しませ、躓きを与えています。わたしには、悪い心が宿っています。まだ、新しくされていない自分を存じております。わたしの失敗が、自分の心に深々と刻み込まれ、新生の恵みを受け、神様の御かたちが、わたしの魂に刻印されることを、熱望しております。

わたしは、ご一家の皆様が幸いのうちに過ごされることを切望します。神様の平和と愛とが、続いて皆様の上に与えられますように祈ります。敬具。

あなたを熱愛するしもべより」

しかし、このような援助にも拘らず、ジョンは、1778年10月20日、厳しく辛い「別れの手紙」をメアリに書くことになり、伝道旅行中とはいえ、1781年10月8日、夫人が「ジョン・ウェスリ夫人」として死去した際にも、死去当日の埋葬後、ジョンに通知されるという事態には変わりがなかった。ジョンへのメアリからの形見は、指輪一つであったという。

(4) *Come, O Thou Traveller Unknown*

メソジスト教会に属する新約学者、古代教会史学者に、Frances M. Youngがいる。著書の一つに、"*Brokenness and Blessing*"というキリスト教霊性の研究書がある³⁵。古代教父たちの霊性に関する教説を論じたものであるが、この書名が示すように、わたしたちは、さまざまな挫折と破れ、*Brokenness*のただ中に置かれている。しかも、*Brokenness*、挫折と破れそのものが、主からの祝福、癒し、救い、きよめ、つまり、*Blessing*にほかならない。まさに恵みの奇跡である。ヤング女史自身、ウェスリ夫妻とは違った形の試練を与えられる身として、神学研究と教育に励んでいる。

ヤング博士が同書において引用するチャールズ・ウェスリの讃美歌がある。"*Come, O Thou Traveller Unknown*"である。12節から成るこの讃美歌は、ヤボクの渡しに独り残ったヤコブが、「名を知られざる旅人」としての天使と組み打ちをして、祝福を得るまでは放しませんと、主の使いにしがみついた姿を歌っている。アイザック・ワッツをして、チャールズの最高傑作と感嘆せしめた讃美歌である。「あなたの御本質 (nature) と、あなたの御名 (name) を知るまでは、決してあなたを放しません。」主そのものを知り、救い主の聖名を知るまではと、歌う者こそ、ヤコブであり、実は、ウェスリその人ではなかったか。

7節からその内容は変わっていく。顔と顔を合わせて知ることとなるのは、"*Tis Love! Tis Love! Thou diedst for me; I hear the whisper in my heart. The morning breaks, the shadows flee, Pure Universal Love thou art. . . .*"という十字架の贖罪の福音である。そして、"*Thy nature, and thy name, is Love.*"という主旋律を繰り返して讃美する。筆者はジョン・ウェスリと妻メアリを学びつつ、

³⁵ Frances M. Young, *Brokenness & Blessing: Towards A Biblical Spirituality*, Baker, 2007.

ふたりが抱かざるを得なかった **Brokenness** を考えさせられている。わたしたちの日々の歩みは **Brokenness** そのものである。特に、牧会生活において、自分と人々の破れ口を見せつけられる。

しかし、同時に、ジョン・ウェスリ自身が、悲惨と見える **Brokenness** のただ中で、福音宣教の業を、決して止めなかった点に教えられる。さらに、「股のつがいを外され」、惨めな姿で歩く **Brokenness** においてではあるが、それが、主の御腕にすがりついて離れない信仰者の証しという **Blessing** そのものとされていることを、彼らは証しして止まないのではないか。ジョン・ウェスリが、生涯、多くの人々に繰り返して教えたように、試練や弱さや限界のすべてが、実は、「全き愛、ホーリネス、神の栄光の御かたちが形作られる」ためであった。さらに、「あなた御自身こそ、あなたの聖名こそ、愛です」という主に対する礼拝と讃詠に至る、彼独特の「愛の神学」に、さらに深く教えられたいのである。

(付記 本小論は、2010年9月に行われた本学会研究会での講演内容を修正し、加筆したものである。)

(日本フリーメソジスト西田辺伝道所牧師)